

ティーチング・ポートフォリオ

健康科学大学 健康科学部 人間コミュニケーション学科

助教 前川 真奈美

1. 教育の責任

人間コミュニケーション学科では、「人間社会における様々な課題に柔軟に対応できる人材の育成」および「福祉や保健・医療等の分野に貢献できる専門職の育成」を教育目標として掲げている。その目標に向けて、社会福祉学と心理学の知見を基盤に多様な人間関係やコミュニケーションに関わる知識・技能を修得していく。

私は人間コミュニケーション学科専任教員として心理学領域の科目を担当している。特に大学生低学年（1～2年次）を対象とした科目が多いため、大学で初めて心理学を学ぶ学生に向けて多彩な心理学領域とその魅力を伝えると同時に、3年次以降に学ぶ応用的・実践的な心理学の土台を構築すること、すなわち心理学の基礎知識を適切に定着させることが本学科における自身の責務だと考えている。過去2年間に担当した心理学領域の科目を表1、表2に示す。心理学領域以外も含む担当科目の一覧については根拠資料(1)、(2)を参照されたい。各科目のシラバスは健康科学大学のホームページ上で公開されている。

表1. 2021年度担当科目（心理学領域に関連する科目のみを抜粋）

科目名	時期	必修/選択	受講者
心理学と心理的支援（心理学概論）	1年前期	必修	60名 ¹
健康科学論 ²	1年通年	必修	136名
共生学	1年/2年前期	選択	78名
障害者心理学	2年/3年/4年後期	選択	24名
児童青年心理学	2年後期	選択	14名
心理学研究法	2年/3年/4年前期	選択	9名
心理面接法 ³	3年/4年後期	選択	7名

表2. 2022年度担当科目（心理学領域に関連する科目のみを抜粋）

科目名	時期	必修/選択	受講者
心理学と心理的支援（心理学概論）	1年/2年前期	必修	73名 ¹

¹ 同時開講の「心理学」（1年/2年前期、必修/選択）の受講者数も含む。

² 全8回中1回を担当した。

³ 全15回中3回を担当した。

健康科学論 ²	1年通年	必修	128名
共生学	1年後期	選択	31名
ホスピタリティコミュニケーション ²	1年後期	選択必修	31名
障害者・障害児心理学	2年前期	選択	26名 ⁴
児童青年心理学	2年/3年後期	選択	36名
社会福祉調査の基礎	2年前期	必修	29名
感情・人格心理学	2年前期	必修	43名 ⁵
健康・医療心理学 ³	2年/3年/4年後期	選択	47名
心理療法Ⅱ	3年後期	選択	9名
心理面接法 ⁶	3年/4年前期	選択	20名

本学での授業の他に、以下のような活動をしている。

- 1) 富士河口湖高校連携授業「健康と科学」(2021年度、2022年度)
- 2) 都留市教育委員会主催 市民大学事業「シリウスカレッジ」(2022年度)
- 3) クラス担任(2021年度：1年生、2年生；2022年度：1年生)
- 4) 学生募集委員会(2021年度)
- 5) 学生・就職・卒後教育委員会(2022年度)
- 6) 「地域おこしサークルLink」の副顧問(2022年度)

1)と2)の活動で学外に向けて本学科の学びを発信するとともに、さまざまな年齢層を対象とする講義を経て得られた気づきを本学の授業運営に還元している。3)の活動ではクラス担任として適宜学生との面談の機会をもち、学生の現状や困り感の聴取ならびに教育的サポートを行っている。4)においては、オープンキャンパスでの企画やInstagramを通して本学科の学びを学外に発信している。5)と6)においては、学園祭運営に係る活動やサークル活動において学生を支援することで、学生の自主性や主体性の育成に関与している。

2. 教育の理念・目的

私が本学で教育活動を行ううえで大切にしていることは二つある。一つは「『知ってい

⁴ 同時開講の「障害者心理学」(3年前期、選択)の受講者数も含む。

⁵ 同時開講の「人格心理学」(3年/4年前期、選択)の受講者数も含む。

⁶ 全15回中4回を担当した。

る』から『活用できる』へ」、もう一つは「お互いの『違い』を認め合える人材の育成」である。

1) 『知っている』から『活用できる』へ

前述のとおり、私は大学生低学年（1～2年次）の段階で心理学の基礎知識を適切に身につけておくことが3年次以降の応用・実践に役立つと考えている。ここで言う「適切に身につける」とは、単に用語と定義を覚えることではなく、学んだ内容がどのように日常や社会で活かされているのかも含めて理解することを意味する。学生の中には、試験や成績のために用語や定義を丸暗記するという学習スタイルが固着している者も少なくない。その場合、全15回（あるいは全8回）の授業内容が単なる断片的な情報の羅列となり、知っているが理解はできていないという状態に留まってしまう。

このことから、「知識を実践に活かすこと」を念頭に置いた授業運営が不可欠であると考える。具体的には、専門的な内容を初学者にも分かりやすく教授する工夫や、授業内容を既存の知識と結び付けたり日常での体験や現象と照らし合わせながら理解できるように促す工夫が挙げられる。加えて、特に大学生低学年を対象とする科目では、「どのように学ぶか」という学修の方法を明示することも重要である。そのため、学生自身が「自分はどこまで理解できていて、どこが理解できていないのか」に目を向けられるような仕組みを用意することも必要だと考える。これらは、本学の教育理念の一つとして掲げられた「専門的な知識・技術力の備わった人材の育成」や、本学科のディプロマポリシーにある「心理学の基本的知識と技能を修得している」にもつながるであろう。

2) お互いの『違い』を認め合える人材の育成

国内外において、共生社会、すなわち「誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会」の実現に向けた取り組みが推進されている。大学も例外ではなく、2018年に中央教育審議会が発表した答申⁷には、これからの大学の在り方について以下のように記載されている。

高等教育は「多様な価値観を持つ多様な人材が集まることにより新たな価値が創造される場」＝「多様な価値観が集まるキャンパス」になることが必要である。

つまり、大学という場およびそこにいる教職員や学生においても、人種、性別、年齢、障害などの表層的ダイバーシティと価値観や考え方などの深層的ダイバーシティの双方の実現が求められているのである。

このことから、さまざまな事象に対する着眼点や受けとめ方が個々に異なることに学生

⁷ 中央教育審議会 (2018). 2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申) .

自身が気づき、そのような違いを認めたくてお互いに歩み寄ることを体験する機会を提供することが肝要であると考え。これは、本学の教育理念の一つとして掲げられた「豊かな人間力の備わった人材の育成」や、本学科のディプロマポリシーにある「一人ひとりの尊厳を高められるような関わりができる」、「多様性を尊重する姿勢を身につけている」にもつながるであろう。

3. 教育の方法

前項の教育の理念・目的で示した「『知っている』から『活用できる』へ」を実現するために実践していることは四つある。一つ目は「視覚的な分かりやすさを重視した資料の作成」、二つ目は「既存の知識とのつながりや日常的な具体例の提示」、三つ目は「学生からの質問への応答」、四つ目は「確認問題の実施」である。また、「お互いの『違い』を認め合える人材の育成」を実現するために実践していることは「アクティブラーニングの活用」である。それぞれについて具体的に説明する。

1) 「『知っている』から『活用できる』へ」の実現に向けた取り組み

1. 視覚的な分かりやすさを重視した資料の作成

授業内容を理解しやすく、復習時にも授業内容を思い出しやすくするために、すべての担当科目において配布資料にイラストや図、研究結果のグラフなどの視覚的な情報を活用している。例えば「心理学と心理的支援」の授業では、感情の生起過程に関する複数のモデルを区別できるように、各モデルの流れをイラストで表し、授業時には学生自身に矢印を書き込んでもらうようにしている（根拠資料(3)）。

2. 既存の知識とのつながりや日常的な具体例の提示

授業内容の体系的な理解を促進するために、新規に扱う内容が既習内容と関連する場合には必ず既習時のスライドを再掲したうえで解説を行っている。例えば「心理学と心理的支援」の授業では、ある概念の提唱者が別の授業回では他の概念の提唱者として再登場することがある。その際、「○○は既にこの授業で登場しています。何の提唱者として紹介したでしょうか？」等の問いかけをし、過去の授業内容を振り返るよう促している。

また、学んだ内容が日常や社会においてどのように活用されているかをイメージしやすくするために、学生にとって身近な体験や現象と照らし合わせながら解説を行ったり、学生自身に具体的な日常例を考えさせる課題を設けたりしている。

3. 学生からの質問への応答

学生の理解を深めるために、毎回の授業後に質問を受け付け、その翌週の授業冒頭ですべての質問に回答している。

4. 確認問題の実施

効果的な学修方法を提示するために、毎回の授業の冒頭（あるいは終了後）に Microsoft Forms で作成した確認問題を実施し、授業内で解説を行っている（根拠資料(4)）。この確認問題に取り組むことで、学生自身が自分の理解できている部分と理解が不十分な部分を把握できるようにするという意図がある。また、確認問題は正誤選択式であり、解説時には正答を伝えるだけでなく、「なぜこの問題の正答は×なのか（この問題文で誤りのある部分はどこか）」や「問題文の誤りのある部分をどのように変えると正答が○になるか」を問いかけている。それによって復習の際に意識すべきポイントを明示できていると考える。

2) 「お互いの『違い』を認め合える人材の育成」の実現に向けた取り組み

5. アクティブラーニングの活用

多様な考えや価値観があることを知り、それを受けとめることを促すために、学生同士の意見交換やグループワークの機会を多く設けている。例えば「共生学」や「障害者・障害児心理学」の授業では、「障害をもつ人が日常生活のどのような場面でのどのような困難を経験しているか、それに対してどのような支援が考えられるか」を考えるワークを課している。その際、他者に同調あるいは迎合するのではなく、まずは自分なりの考えを明確にし、そのうえで他者の意見を聞いて多様な視点に気づくという体験をしてもらうことを意図し、「Think-Pair-Share（最初に一人で考える時間を設け（Think）、その後指定された他者と意見交換し（Pair）、最後にクラス全体で共有する（Share）するというステップを踏むアクティブラーニングの手法）」を活用している。

4. 教育の成果・評価

本学では前期終了時と後期終了時にそれぞれ学生による授業評価アンケートを実施している。その回答結果や授業時の学生の様子をもとに、前述の「教育の方法」の効果や改善点について考察する。

1) 『知っている』から『活用できる』へ

2021 年度および 2022 年度の「心理学と心理的支援」、「障害者・障害児心理学」、「児童青年心理学」の授業評価アンケートを見ると、自由記述欄に「スライドにグラフや絵などが使われていて分かりやすかった」、「それぞれの内容に具体例が挙げられており、専門用語も理解しやすくなっていた」、「今まで考えてきたことや、人間関係など当てはまるものが多く、とても興味深いと思いました」といったコメントが複数寄せられていた。さらに、「毎回の小テストや質問が非常に意義のある時間になっていた」、「出席確認で行うクイズ

は、自分がどこまで理解しているかが分かって良かった」というコメントも見られた。このことから、「『知っている』から『活用できる』へ」の実現に向けて実践した四つの取り組みはいずれも教育的意義があったと判断できる。

他方、「予習、復習を含めた授業時間外にもこの授業に関連する知識の習得に努めた」の項目については多くの科目で低い得点であった（表 3）。前掲した自由記述欄のコメントと合わせて考えると、授業内容と日常生活を結びつけて捉えるよう促すことはできたものの、その効果は授業時間中のみで完結しており、授業時間外に主体的に調べるところまでは至らなかったと言える。そのため、普段の日常生活においても興味関心が持続するような工夫を加える必要がある。

表 3. 各科目の「予習、復習を含めた授業時間外にもこの授業に関連する知識の習得に努めた」の科目平均

	2021 年度	2022 年度
心理学と心理的支援	4.3	3.8
障害者・障害児心理学	4.1	3.5
児童青年心理学	2.8	3.9
共生学	3.9	4.1

2) お互いの『違い』を認め合える人材の育成

2021 年度および 2022 年度の「障害者・障害児心理学」、「共生学」の授業評価アンケートを見ると、自由記述欄に「グループワークをすることにより自分と違った新たな考え方や発見があったので、改めて意見交換することは重要だと感じました」、「グループワークにより新しい考えを持つことができ、より授業に対する理解が深まった」、「グループワークを活用し、様々な人と知識や意見・考え方を共有することができ、とても有意義な授業だと思った」といったコメントが複数寄せられた。このことから、「お互いの『違い』を認め合える人材の育成」の実現に向けて実践した取り組みは教育的意義があったと判断できる。

他方、授業時のグループワークの様子を見てみると、話し合いに参加していない学生や、各々の意見表明のみに留まりディスカッションに至らないグループなども見受けられた。そのため、教員によるフォロー・介入や意見を発信しやすい環境調整という点で課題が残った。

5. 今後の目標

短期目標：前項で挙げたように、「授業時間外での主体的な学び」という点で課題が見つ

かった。今後は、授業内容と関連する直近のニュースや学生にとって身近なトピックなどの時事的な情報をより多く授業に取り入れ、授業時間外にも「そういえばこれはあの授業の…」と思い起こしてもらえるような授業にできるよう改善したい。

長期目標：前項で挙げたように、「アクティブラーニング中の教員側のフォロー」という点で課題が見つかった。今後は、教員側の介入スキルの向上を目指してアクティブラーニングに関する研修会等に参加し、グループワークに対する動機づけが低い学生や苦手意識の強い学生に適した支援や指導方法について学んでいきたい。

6. 根拠資料

- 根拠資料(1)、(2)：2021年度ならびに2022年度の担当科目一覧
- 根拠資料(3)：「心理学と心理的支援」の配布資料（抜粋）
- 根拠資料(4)：確認問題の一例

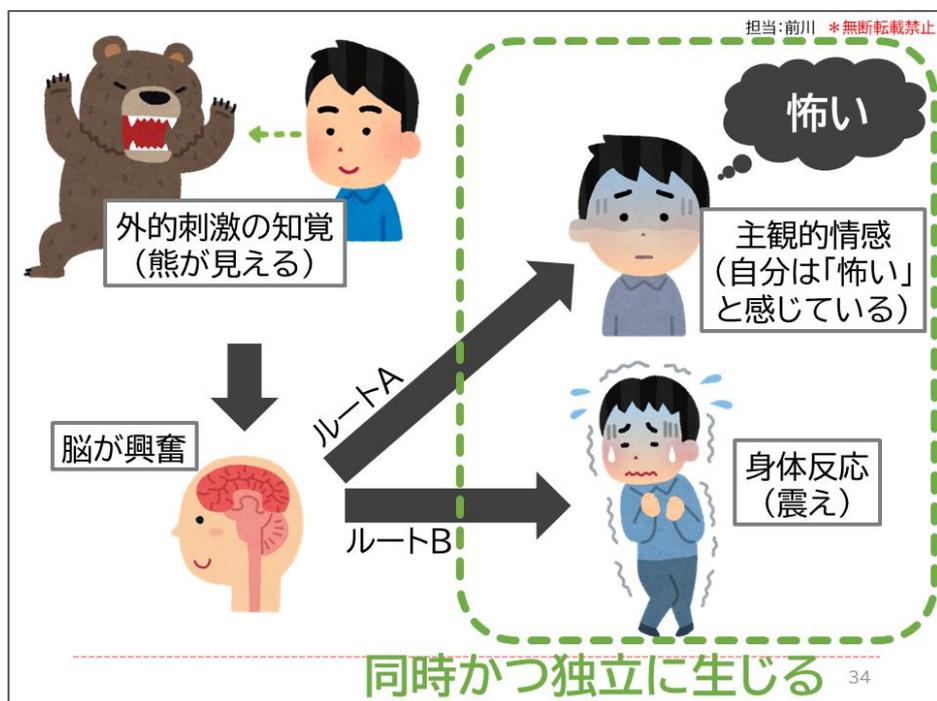
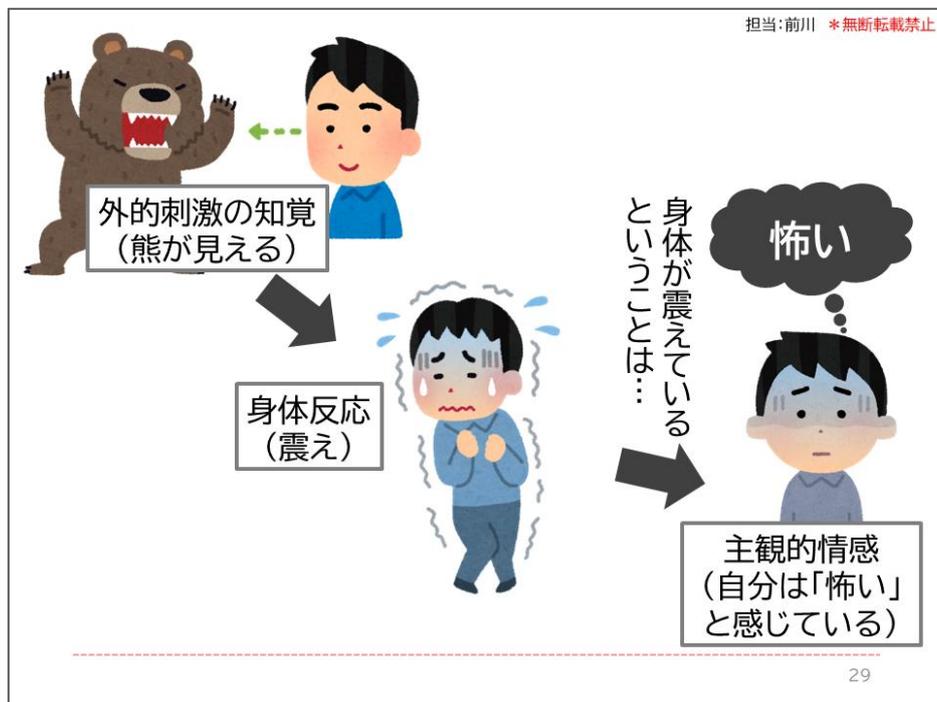
根拠資料（１）：2021 年度担当科目一覧

科目名	時期		受講者
【総合基礎科目領域】			
基礎演習Ⅰ	1 年前期	必修	13 名
基礎演習Ⅱ	1 年後期	必修	14 名
心理学と心理の支援 (心理学概論)	1 年前期	必修	27 名
心理学	1 年/2 年前期	必修/選択	33 名
心理学理論と心理の支援	2 年/3 年前期	必修	12 名
健康科学論 (1/8 回)	1 年通年	必修	136 名
共生学	1 年/2 年前期	選択	78 名
【専門科目領域 専門基礎科目群】			
障害者心理学	2 年/3 年/4 年 後期	選択	24 名
児童青年心理学	2 年後期	選択	14 名
【専門科目領域 専門科目群】			
心理学研究法	2 年/3 年/4 年 前期	選択	9 名
心理面接法 (3/15 回)	3 年/4 年後期	選択	7 名
福祉心理学基盤演習Ⅰ	1 年前期	必修	13 名
福祉心理学基盤演習Ⅰ	2 年前期	必修	14 名
福祉心理学基盤演習Ⅱ	1 年後期	必修	14 名
福祉心理学基盤演習Ⅱ	2 年後期	必修	14 名
【他学部設置科目】			
学習と行動	看護学部 1 年後期	選択	29 名

根拠資料（２）：2022 年度担当科目一覧

科目名	時期		受講者
【総合基礎科目領域】			
基礎演習Ⅰ	1 年前期	必修	13 名
基礎演習Ⅱ	1 年/2 年後期	必修	13 名
心理学と心理的支援 (心理学概論)	1 年/2 年前期	必修	35 名
心理学	1 年/2 年/3 年 前期	必修/選択	38 名
健康科学論 (1/8 回)	1 年通年	必修	128 名
共生学	1 年後期	選択	31 名
ホスピタリティコミュニケーション (1/8 回)	1 年後期	選択必修	31 名
【専門科目領域 専門基礎科目群】			
障害者・障害児心理学	2 年前期	選択	24 名
障害者心理学	3 年前期	選択	2 名
児童青年心理学	2 年/3 年後期	選択	36 名
【専門科目領域 専門科目群】			
社会福祉調査の基礎	2 年前期	必修	29 名
感情・人格心理学	2 年前期	必修	30 名
人格心理学	3 年/4 年前期	選択	13 名
健康・医療心理学 (3/15 回)	2 年/3 年/4 年 後期	選択	47 名
心理療法Ⅱ	3 年後期	選択	9 名
心理面接法 (4/15 回)	3 年/4 年前期	選択	20 名
福祉心理学基盤演習Ⅰ	1 年/2 年前期	必修	15 名
福祉心理学基盤演習Ⅰ	2 年/3 年後期	必修	1 名
福祉心理学基盤演習Ⅱ	1 年/2 年後期	必修	15 名

根拠資料(3)：「心理学と心理的支援」の配布資料（抜粋）



根拠資料(4)：確認問題の一例

この「確認問題まとめ」チャンネルについて

【必ずお読みください】 このチャンネルの活用方法と注意事項について

'23 114401 心理学と心理的支援（心理学概論） 月5/112701 心理学 月5
受講生の皆様
出席確認を兼ねて実施している確認問題を、繰り返し回答可能な形式（Forms）で共有していきます。
以下の注意事項をお読みのうえ、継続的な復習にご活用ください。
詳細表示

新しい投稿

心理学と心理的支援（心理学概論）／心理学_第1回講義確認問題（2点）

1. 心理学では心の働き（意識）を研究対象としているため、科学的な手法（実験、調査など）は用いられない。*（1点）

○（内容は正しい）

×（内容に誤りがある） ✓

2. 学問としての「心理学」のはじまりは1879年とされている。*（1点）